特集

家族に介護が必要になった時に

人口減少とともに、日本は世界で例がない急速な高齢社会が進む国と言われています。いつかは訪れる親の介護、夫や妻の介護について私たちは日頃から備えておきたいものです。

Oさん（57歳・女性）の体験より

本誌読者のOさん（小平市）は同居中のおかあさんを自宅で介護しています。昨年自身に突然訪れた母の介護についてのいきさつ、その体験を書いて送ってくださいました。

大腿部骨折で手術、入院した母を退院後自宅で介護することになった。入院した時に医師から告げられたのは、入院するのは3週間以内、その後は、リハビリ専門病院に転院するか、自宅介護かになるということだった。母が精神的に不安定だったため、落ち着ける自宅での介護を選ばざるを得なかった。「3週間のうちに何をしなければならないか…」。いつか必要になると思っていたけれど、当面すると戸惑ってしまった。ネットで介護保険について調べ、近くの地域包括支援センターに行けばいいことがわかった。探し回って訪ね、すぐに「要介護認定」の申請をした。

それからサービス利用の手順にしたがって、訪問調査、医師の意見書提出→要介護審査・判定→認定結果通知→ケアマネージャー依頼→ケアプラン作成→サービス利用となったわけだが、退院までの限られた日数の中でのそれは大変なことだった。

廊下やトイレに手すりをつけたりするのが、間に合わない。介護サービスの住宅改修は、事前申請して認可されて、という手続きを待たなければならないから。結局、ケアプラン作成前に、手すり取り付けと電動ベッド借り入れは、自前でやった。（要介護認定後に、介護サービス適用ができる部分もあったが）退院時には、ほのぼのマイタウンに載っていた介護タクシーにお願いして、とても親切にしていただいた。

困った時に、どこの誰に相談したらいいのか、それが分かっているだけで、どんなに助かることか。

ケアマネージャーや福祉用具専門相談員を決めてからは、本人の希望も聞きながら、必要なサービスを受けることができている。浴室の改修や歩行補助用具の選定については、何度も相談をして、専門的なアドバイスをもらったり、試行させてもらったりもした。

私たちは同居していたから何とか対応できたけれど、独居や高齢者二人の場合は、もっと大変なのだろうと思う。地域のネットワークがしっかりと張り巡らされていればと考える。

介護問題は広範囲で、難しい課題も抱えていますが、今回はOさんの体験を踏まえ、介護の一歩に知っておきたい、本誌が選んだ地域の介護関連の会社を紹介しましょう。いずれも、しっかりと地域に根ざし、介護サービスについての信念と思いがある経営者です。

介護用品が必要になった時

Oさんのお母さんの場合も、退院後すぐに介護ベッド（特殊寝台）が必要になるので、退院前に手配することが必要でした。

介護用品と福祉用具が何でも揃う、清瀬市の「ホームケアセンターイワサキ」の社長、岩崎悟さん（68歳）に伺うと、今、レンタル用品としては介護ベッドの利用が一番多いそうです。介護ベッドといっても、さまざま

〈店舗〉清瀬市中里3－1114－8
TEL/FAX 042（493）7950

な種類と特長があり、使用する本人の状態と生活動作によって選びます。こんな時、その人の家庭環境にも合った用具を的確にアドバイスしてくれるのが、福祉用具専門相談員です。同社では20人のスタッフのうち、16人がこの資格を持っているそうです。用具の知識やアドバイスに加えて、岩崎さんが社員に徹底させるのは「丁寧な言葉使いと清潔な服装に気をつけること。要は一人一人の心がけが大切であること」。やさしく親切な対応には利用者からお礼のハガキが届くほどです。

介護ベッドだけではなく、多種類の車いす、歩行器、歩行補助杖、手すり、スロープなどのレンタル用品は多くが介護保険対象の用具で、介護保険認定であれば、月極レンタル価格の1割分の負担で済みます。

小物からベッドまで介護用品が揃うショップ内

日々の訪問で介護の現場に接する社員の方は「介助者にかかる負担をどのように軽減するか…を考えるのも私たちの仕事だと思っています」と話します。

ショップ内には軽くて着脱しやすい靴や杖、食事の介助器具など、ありとあらゆる商品がならんでいます。これらを上手に使いこなして、介護者の負担を軽くしたいものです。

ホームケアセンターイワサキの訪問可能エリアは清瀬市をはじめ、東久留米市、西東京市、小平市、東村山市、練馬区、武蔵野市、埼玉県の近隣市に及んでいます。

■〈本社事務所〉
清瀬市中里3－1118－1
TEL042（492）3522
営業時間　9時～19時
http://www.hcc-iwasaki.co.jp

地域密着の介護タクシー

Oさんの体験記で、退院時に利用した、本誌掲載の親切な介護タクシーというのは東村山市の「むさしのケアキャブ」のことです。

介護タクシーは車椅子やストレッチャーのまま利用でき、付き添いの人も一緒に乗車できます。入退院、通院、買い物、散策、旅行など、高齢者や要介護者、身体が不自由な方だけではなく、骨折や腰痛などで歩行が困難な時も利用でき、年々ニーズが高まっています。

むさしのケアキャブ代表の橋詰登志夫さん（61歳）は自身が骨折した時、松葉杖で電車通勤した苦労や、父親が脳出血で倒れた経験から、介護に関心を持ち、企業を55歳で早期退職して介護タクシーを創業した方です。開業前にケア輸送士、ヘルパー2級など数種の資格を取得。事務所には救急救命士の免許を持つスタッフも常駐。

日々、安心安全運転の橋詰さん

大型車には酸素設備、点滴架設備、吸引器、AEDなどが搭載されていて、民間救急の役割も果たす、乗って安心の介護タクシーなのです。

遠距離移動の利用者も多く、熱海や浜松、山梨県、長野県などへ転院や帰省、温泉リハビリのために出向く方が一度利用するとリピーターになります。「遠くまで行かなくても、公園の散歩に出るだけでも、お客様の目の色が輝いてくるのです。出かける喜びを一人でも多くの方に味わってほしい。そのお手伝いをすることが私の役目です」と橋詰さん。被介護者の笑顔に接することは、介護する側の喜びでもあります。移送サービスだけに終わらない、社会貢献を常に心がける介護タクシーです。

車いす、ストレッチャーで乗車できる介護タクシー

利用は完全予約制。車椅子1台と付き添い3～4名が乗車できる普通車は初乗り運賃710円（大型車は750円）、加算料金も一般タクシーと同じ。その他、乗降介助作業料（特殊車両使用料含む）1000円が加算されますが、時間制運賃もあるので、詳しいことはお問合せを。

■東村山市青葉町2－28－6廣田ビル
TEL　042（394）1920
問合せ・予約（無料）10時～21時
（株）ボックスオフィス
http://www.musashino-kaigotaxi.com

家族に代わってお手伝い

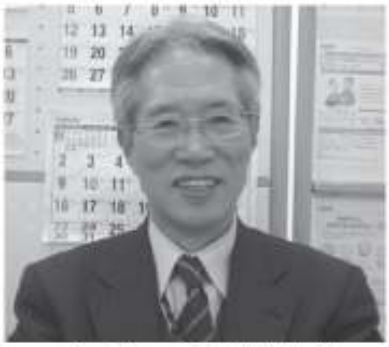
母親を介護中のOさんの心配のひとつに「親戚に急な不幸があった時に母を連れていけない。どうしようか」ということがあります。そんな急な場合や介護保険を使わない家族介護のお手伝いをしてくれるのが、小平市にあるダスキンの自費介護サービス「ホームインステッド小平ステーション」です。

家族が不在時の見守りや世話、入院中や退院後の衣類の洗濯、買い物や食事作り、話し相手、通院の付き添いなど1回2時間から、24時間365日、自宅でも施設でも日常の「困ったこと」に柔軟に対応してくれます。「昨夏は暑すぎたので、ご高齢の方が自宅の草取りができない、と草取りの依頼もありました」とマネージャーの穴見日出雄さん（66歳）。スタッフは約50人、ほとんどが女性で3分の2はヘルパー資格を持っています。穴見さん自身も現場で先頭に立ち、「お客様が心で本当に望んでいることを、やって差し上げることが本来のサービス」だと考えています。

事務所でスタッフの打ち合せ中

最近増えてきているのが、認知症の方の見守りや夜間滞在です。スタッフが心がけているのは、認知症の方には敬語を使うこと。柔らかい言葉とトーンで話し、尊厳の気持ちで接すること。危険がない限り行動の選択権はその方に渡すようにし、押しつけないこと。このことは難しいけれど、家族が介護する時も大切なことでしょう。

スタッフの車いす研修


マネージャーの穴見日出雄さん

「介護はみこしのようなものだと思います。さまざまな分野の専門家が集まって皆で担ぎ、息を合わせバランスがとれればいいサービスができます。ご家族も一緒に参加して、皆で介護を支えていくチームワークが必要ですね」。介護保険ではできない事もあるので、融通性ある介護サービスをリストアップしておきましょう。

■基本サービス　8時～22時（1回2時間より）1時間あたり　3150円（家事でも身体介護でも同一料金、土日・祝日も同じ、交通費込み、入会金なし）

■小平市津田町1－18－30
フリーダイアル
0120－447－345
受付9時～17時30分
http://homeinstead.duskin.jp

本誌連載「私の居場所づくり」コラムでおなじみの介護福祉士、本田聖恵子さん。本田さんのご主人が昨年、突然脳梗塞を発症され、幸い軽かったのと適切な処置で、ほぼ正常な生活に戻られましたが、その時の介護について語ってくださいました。

「親切や同情は〝甘やかし〟になってしまいます。相手の気持ちに共感しながら、あせらず見守る心の余裕が、介護者には必要だと思います。大変と思わず、神様がくれた時間のゆとりと感謝しながら、毎日が生活リハビリ。共通の話題を作って楽しんでいます。主人の病気のことは知人、友人、ご近所さんに知ってもらって、それがコミュニケーションのきっかけになり、閉じこもりの心配をすることもありませんでした。地域で支えられて日々元気を取り戻していることを実感しています」。

子育てとは違って、期限がない介護の日々。その苦労は当事者にしかわからないことかもしれません。けれども私たちは地域のより良い情報を共有し、〝がんばり過ぎない〟介護でありたいと思います。誰にもいつかは訪れる介護、そして介護される立場、地域ぐるみで支え合える関係を今後も考えていきたいものです。